

旅と教育

～ミッシェル・オスロ『アズールとアスマール』とフランス～

た ぐ あ き
田 口 亜 紀

1. はじめに

世界で三番目のアニメーション映画の製作数を誇るフランス⁽¹⁾は注目に値する。芸術的水準の高さは驚くべきもので、本稿で取り上げる『アズールとアスマール』はその筆頭に挙げられよう。『アズールとアスマール』はミッシェル・オスロが手がけたアニメーション映画で、2006年のフランス公開の翌年に、スタジオジブリが日本語版（吹替版と字幕版）を配給した。スタジオジブリの創設者のひとりで、オスロ監督の旧作『キリクと魔女』を高く評価していた高畑勲監督は、日本版の監修・翻訳・演出をみずから行った。高畑監督はこの映画を「日本の傑作とは面白さの質がまるでちがう明快至極な傑作」だと評し、本作の狙いは「異なった人種や民族、文化圏などの間にある反目や偏見を取り除き、人々が相互理解と融和に向かうための基盤づくりに役立つことを、とびきり美しく面白く語る」ことであると解説する。さらに高畑監督は続けて、オスロ監督は「スピーディーな展開のなかに、観客がこの問題を考えていけるための大事なポイントを、十分な現実的描写によって豊かに織り込⁽²⁾」んだと述べている。社会の分断がますます進む中、このメッセージはとりわけ強く響く。

アクチュアルな問題を提起すると同時に、歴史から学ぶことができるこの映画を、筆者はフランス語テキストとして、フランス語圏文化に親しむための教材として、2017年から大学の演習で本作を取り上げてきた。シナリオから読み取れるメッセージや映画のコンテキストを文章にまとめておくことは無駄ではないだろう。本稿の目的は、まずこれら映画のテーマを読み取り、異文化の教材としての可能性を探ることにある。その際、教育現場での試みをフランス社会の文脈に位置付けつつ、「生粋の」フランス人（ガリア、ラテン、ゲルマン系祖先をもつと言われる Français de souche）と「後から来た」ニューカマーのフランス人（特にフランス旧植民地出身で「移民」や「〇世」）の共存という課題を取り上げる。これについてのフランスの学校の取り組みを紹介する。そして本稿の付録

では、映画の授業の教授用資料の一覧が参照できる。

2. 言語体験

『アズールとアスマール』公式サイト（日本語版）のイントロダクションは映画を簡潔に紹介している。

アラビア人の乳母ジェナヌに、まるで兄弟のように育てられた、青い瞳のアズールと黒い瞳のアスマール。領主の子アズールは青年となり、幼い頃聴いた乳母の子守歌を頼りに“ジンの妖精”を求めて海を渡る。

しかし、苦難の末に辿り着いた憧れの国で、最初に聞いた言葉は「青い目は不吉」。一方、乳母ジェナヌとその子アスマールは、すでに海を渡り、ここイスラムの地で大富豪となっていた。領主の子と使用人の子という関係だったアズールとアスマールは、海を越えただけで何もかも逆転してしまう。

仕方なく盲目のふりをして歩き出したアズールにとって、この国のすべては醜くまた不可解なものばかりだった。しかし、ジェナヌをはじめ、物乞いのクラプー、シャムスサバ姫、賢者ヤドアなど、異国の文化や言語の中で逞しく生きている、個性的で魅力的な人々と出会っていく中で、この国の本当の美しさを発見してゆく。個々の付き合いこそ、人種や民族、文化圏の間にある偏見を乗り越えるための第一歩なのだ。

人工的に作られた迷信や誤解によって、異なる者同士が争い合っている世界。様々な違いによって区別され差別される社会構造。オスロ監督は、このような現代にむけて、人々が相互に理解し合い融和していく為の、希望に満ちたこのお話を、とびきり美しくまた面白く語っているのだ⁽³⁾。

オスロ監督は、フランス語とアラビア語の世界を対比させる手法を採る。映画の前半はフランス、後半はイスラム文化圏が舞台になる。冒頭の場面は中世フランスの貴族の城館である。ジェナヌに分け隔てなく育てられたアズールと乳兄弟のアスマールは言い争いをしている。

Asmar : D'abord, mon pays c'est mieux qu'ici.

Azur : Tu ne sais même pas ! Tu n'y es jamais allé.

Asmar : Oui, mais ma maman l'a dit.

Azur : C'est pas vrai ! Elle n'a jamais dit ça !

Asmar : Si elle l'a dit !

[...]

Azur : D'abord, ton pays c'est ici, tu y es né.

Asmar : Non, c'est pas mon pays !

Azur : Si c'est ton pays.

(訳)

アズール：第一、ぼくの国はここよりいいんだから！

アスマール：知ってるわけないだろう！ 行ったことないのに。

アズール：そうだよ！ でもぼくの母さんが言ってたよ。

アスマール：うそだ。そんなこと言ってないよ。

アズール：いいや、言ってたよ

アズール：第一、おまえの国はここだろう。ここで生まれたんだから。

アスマール：いいや、ここはぼくの国じゃない

アズール：いいや、ここはおまえの国だよ⁽⁴⁾。

« Tu n'y es jamais allé. » « Oui, » のやりとりで、フランス語の否定文を受けて Si/Non の Non で返すべきところを、Oui で答える点に、文法を使いこなしていない子どもの会話の特徴がうかがえる。ここでは登場人物である子どもの帰属意識が問題になる。青い目で金髪のアズールは生粋のフランス人を、褐色の肌でアラビア語を話すアスマールはニューカマーの移民を想起させる。実際、オスロ監督はインタビューで、映画の後半に舞台になるのは北アフリカのマグレブ諸国であること、映画の主題は現代フランスの移民問題につながっていることを語っている⁽⁵⁾。アラブ人アズールは生まれ育っている場所を自分の国だと認識していない。「ここ」ではなく、自分のルーツのある場所が本来自分のいるべき場所だと信じている。教育を受けずに、ボロを着ているアスマールと、教育を受け、身なりのよいアズールとの社会的身分の差は歴然としている。

アズールもアスマールも片親の子どもである。アズールには父親がいるが、当時の貴族のしきたりに従って、親は直接子どもの教育をするわけではないので、物語では権威としての父親の存在が強調される。次に引用する場面では、母親がいないアズールと父親のいないアスマールが母親の取り合いをする。

Azur : D'abord, t'as même pas de papa !

Asmar : ... Oui, mais toi t'as pas de maman !

Azur : ... Oui mais maintenant ta maman, c'est aussi ma maman.

Asmar : Ah non ! C'est MA maman, c'est pas la tienne !

Azur : Si c'est aussi la mienne.

(訳)

アズール：第一、おまえには父さんがいないじゃないか！

アスマール：そうさ、でもおまえには母さんがいないじゃないか！

アズール：そうだよ！ でもおまえの母さんは、ぼくにとっても母さんだよ。

アスマール：ちがうよ。それはぼくの母さんで、おまえのじゃない。

アズール：いいや、ぼくにとっても母さんだよ⁽⁶⁾。

続く会話はアラビア語で行われる。

(正則アラビア語⁽⁷⁾ からフランス語への翻訳)

Asmar : Non, c'est MA maman, pas la tienne !

Azur : Si c'est aussi la mienne ! D'ailleurs, c'est moi qu'elle préfère.

Asmar : OH ! C'est pas vrai ! Tu vas voir⁽⁸⁾ !

(フランス語からの重訳)

アスマール：いいや、ぼくの母さんで、おまえのじゃない。

アズール：いいや、ぼくにとっても母さんだ！ それに母さんはぼくの方が好きなんだ。

アスマール：なんだって！ そんなのうそだ！ 見てろ！

この場面で話されるアラビア語の会話は、直前のフランス語での会話とほぼ同じ内容であるが、アズールが母親（乳母）のお気に入りには自分だといって、アスマールに喧嘩を売るくぐりぐりはアラビア語での会話にしかない。

ところが映画で話されるアラビア語がまったく訳されていないことに観客は面食らうだろう。実はこれはオスロ監督が意図したことである。アラビア語の会話部分にはフランス語の字幕をつけずに、そのまま提示した理由を監督自身がこう述べる。

アラビア語を訳さないことが、ある意味では失礼なのかもしれないけれども、でも、ある意味ではそれが魅力になる。二面性をもっていて、ここはもう訳さないほうが魅

力がある。アラビア語というのは、ある時代非常に反映した広大な地域を結ぶ言語だったということで、地球全体の歴史上からも非常に重要でした。移民の問題というのもあって、その問題を理解してもらいたいというのもあって、わざと訳さなかった⁽⁹⁾。

オスロ監督は興行収入を犠牲にしてもこの点は譲らなかった。それを雄弁に物語るエピソードがある。カンヌ映画祭で本作が紹介され、すぐにドイツの大きな配給会社からオファーが来た。ドイツはヨーロッパの中で最も重要なマーケットだから、ドイツでの映画公開では大きな興行収入が見込めるのである。ところが、ドイツの配給会社はオスロ監督の意図を理解できずに、アラビア語の部分もドイツ語に吹き替えると言ってきたため、オスロ監督はその商談を断ったというものである。(結局、オスロ監督の要求に適ったドイツの別の会社の配給によって、映画はドイツでも公開されることになった。)

フランスでの封切に際しても、プロデューサーの要求にもかかわらず、オスロ監督はアラビア語部分を訳さない方針を死守した。これについて監督は、「映画の中で実際に使われている言語がふたつ登場するというのはおもしろいと思います。なので、片方で全くわからない状況をつくって、ほかは100%わかるものにしたかったです⁽¹⁰⁾」と、観客側の鑑賞方法まで計算に入れていたことを明らかにしている。

観客のフランス人は、言葉の通じない異国での体験を擬似的にすることになる。フランスではフランス語ですべてことが足りてしまう。フランス語が話せないのは相手が悪い。言葉で伝えることがとりわけ重要視されているフランス社会では、フランス語話者は絶対的な優勢に立つ。オスロ監督のねらいは、優勢にあることに疑いを持たない人(マジョリティ)を、その言語が使えない人(マイノリティ)の立場に置くことによって、その不自由さを想像させることにあるといえる。

高畑監督は日本語版の制作においてもオスロ監督の方針を踏襲し、日本語版でもアラビア語での会話に日本語の字幕や吹き替えをつけていない。

私たちは何でも物事の意味を知りたいと思っている。何にでも説明を求め、答えが与えられると、それでわかったものと満足する。しかし実際のところは「わかった気である」に過ぎない。自分が理解できないことを切り捨て、実は理解できる範囲でしか世界を見ていないことに気がついていないのである。誤解を恐れず言うなら、「わかった」と思うことは心地よく、心に平安や安定をもたらしてくれるが、そこで立ち止まってしまうことなのである。

オスロ監督の仕掛けに引っかかると、一部の台詞が理解できずにもどかしい気持ちになる。画面の視覚情報から台詞の内容を想像することはできるが、正しく捉えることはできない。上述の場面では、アラビア語の台詞「それに母さんはぼくの方が好きなんだ」はフ

ランス語の台詞ではなく、フランス語（日本語版なら日本語）モノリンガルがこの内容まで知ることはできない。フランス語（日本語版なら日本語）とアラビア語のバイリンガルであれば台詞をすべて理解することはできる。言語の修得がいかに世界の理解を助けてくれるかという指摘もできるだろう。まさに物語でバイリンガルの優位性が示される。映画で、悪徳商人ウアル一味に捕らえられたアスマールが、アズールも同じく捕まる危険を察知して、一味には理解できないフランス語で危険を知らせる。

Asmar : Azur au-dessus de toi !!

[...]

Azur : Asmar ! Mais tu parles ma langue !

Asmar : Évidemment. C'est aussi la mienne, je l'ai apprise avec toi !

(訳)

アスマール：アズール、頭上だ！

[...]

アズール：アスマール！ほくの言葉〔フランス語〕を話すのか！

アスマール：もちろん！ほくの言葉でもある。一緒に身につけたじゃないか！

言語の重要性は別の箇所では決定的になる。乳母ジェナヌは、フランスにあるアズールの父の屋敷から追い払われて、海の向こうの国で商人として成功した（この時代に女性が商人で成功することには時代錯誤があるとオスロ監督自身が告白しているが。）乳母がアズールと再会するときの台詞によって、迷信や偏見に見向きもしなかった理由が明らかになる。

Jénane : Je connais deux pays, deux langues, deux religions, ce qui fait que j'en sais deux fois plus que les autres. Pendant que les autres s'arrêtent à cause d'yeux bleus ou de chats noirs, moi je m'active et je GAGNE ! Qu'on n'évoque plus jamais cette sottise des yeux bleus devant moi !

(訳)

ジェナヌ：私は二つの国、二つの言葉、二つの宗教を知っている。つまりそれらについて他人よりも二倍知っているということなんだよ。他人が青い目や黒猫〔の迷信〕のために立ち往生しているときに、私は働き、勝ち取ったのだよ。今後、私の前で青い目の愚かな話をしてはならない！

このように、ジェナヌの台詞からは、複言語によって相対的な見方を身に着け、物事を大きな視点で見ることの重要さが強調される。ひとつの国、言葉、宗教の中にとどまっている者は、それがすべてだと思い込み、ほかの見方があることに気がつかない。迷信や偏見はそこから生まれることを雄弁に語っている。また、迷信を信じることは、思考停止を意味し、その根拠を挙げたり、ものごとを疑ってかかるという考えとは相いれない。相対的な視点は対話によって生まれる。

オスロ監督は、別の場面における「対話」の姿勢を映画の見せ場にもしている。アズールが「野獣語」が話せるようになる飴玉を口に入れ、深紅のライオンと話す場面である。アズールは洞窟の入り口までライオンに連れてもらう話をつける。(当然ながら野獣語は訳されていない。) 対話はオスロ監督作品の重要なテーマであり、同じく他の作品でも変奏されている。オムニバス映画『プリンス&プリンセス』⁽¹¹⁾の短編には、固く門を閉ざした城に武力で入ろうとしても誰も入れず、「入れてもらえませんか」と言葉で頼んだ人だけが城に入れるというエピソードがある。相手を知らないまま力で屈服させるのではなく、対話を通して意思疎通を図り、相手を知るというメッセージがここから読み取れる。

物語にはさらに多言語話者が登場する。

Crapoux : C'est un grand médecin entre autres choses. Ce pays a de la chance de l'avoir.

Le Sage Yadoa : Bienvenue, Azur, fils de Jénane.

Azur : Mais vous parlez ma langue !

Le Sage Yadoa : Oui, nous venons du même pays.

Azur : Pourquoi en êtes-vous parti ?

Le Sage Yadoa : Mon arrière-arrière grand-père était né au loin et on me traitait d'étranger, et on me tourmentait, au point que j'ai dû me réfugier ici.

Azur : Et ici, on ne vous considère pas comme étranger ?

Le Sage Yadoa : Si, mais on ne me tourmente pas. Je poursuis mes recherches et j'enseigne le grec et l'hébreu à la Princesse Chamsous-Sabah. Que Dieu la garde, elle l'avenir de ce pays.

(賢者ヤドアはヘブライ語で助手に指示を出す)

(訳)

クラブー : [賢者ヤドアは] なにより偉大な医者なんだ。この医者がこの国にいて幸

이었다。

賢者ヤドア：よくぞいらっしゃった。ジェナヌの子アズール。

アズール：なんと、私の言葉をお話しになる！

賢者ヤドア：ええ、同郷の出身なのだから。

アズール：なぜ故郷を去ったのですか。

賢者ヤドア：私の先祖はそこから遠く離れたところで生まれたので、自分はよそ者扱いされたのです。迫害され、ようやくここに逃れてきたのです。

アズール：ここでは先生のことをよそ者扱いしないのですか。

賢者ヤドア：しますが迫害はしません。研究を続けることができ、シャムスサバ姫にギリシア語とヘブライ語を教授させていただいています。姫に神のご加護あれ！姫はこの国の未来なのだから。

オスロ監督は、ここで中世イスラム世界の寛容的な政策を思い起こさせる。本作は中世アラブ文化圏の英知をふんだんに盛り込んでいる本稿の付録を参照されたい。

3. エンターテインメントの「冒険」とイニシエーションとしての「旅」

オスロ監督はインタビューの中で、映画作品の舞台を中世に設定したことについて、現代社会で沸き立っているテーマをそのまま扱うのではなく、時代をずらして設定する必要があると述べている。主題の深刻さにもかかわらず、映画が子どもたちを退屈させない理由は、冒険譚であるからだろう。映画の前半にはおとぎ話が語られ、後半にはアズールとアスマールは冒険の旅に出立し、英雄＝主人公を生きる。理想の女性を獲得するための試練という意味では騎士道物語をなぞっている。ジンの妖精の女性は救済を待っているだけの受け身の女性であり、結婚する相手はアズールでもアスマールでも構わないようで、定められた運命に従うようである。（ただし自分の意に添わない挑戦者は切り捨てることができる。）ところが、ダンスが始まり、パートナーと踊っているうちに、自分と一緒に踊っているアスマールではなく、アズールに惹かれると自分の気持ちを伝える。エルフの妖精もしかり、自分はアスマールに惹かれるのだと言う。

オスロ監督は冒険譚に悪人、協力者といった物語の構成要素を過不足なく盛り込み、エンターテインメントに仕上げるが、各場面の背景は注目に値する。

冒険の要所要所に現れる廃墟、遺跡は、古代ローマ帝国からカルタゴ、チュニジア、地中海世界、イスラム世界が辿った歴史を彷彿とさせる。アスマールが悪徳商人の一味に襲われるのは古代ローマ帝国の円形劇場の遺跡、その後、ローマの水道橋も現れる。二人は

ビザンティン様式建築の教会の前を通る。ジンの妖精の宮殿内部はイスタンブール（旧オスマン帝国コンスタンチノーブル）のアヤ・ソフィア（ハギア・ソフィア）を模している。この建造物はキリスト教の聖堂からモスクとなり、博物館となっており、映画制作時の2005年には、キリスト教とイスラム教の共存の象徴だった⁽¹²⁾。そしてこの旅を通して、アズールとアスマールはお互いに助け合い、かつての兄弟の絆を思い出す。アスマールが抱えていたわだかまりは消え、自分が犠牲になっても兄弟を助けるまでに変貌する。その意味では心の成長の物語である。

この映画は結末に重要なメッセージがある。ジンの妖精の宮殿で、結婚相手を選ぶ場面である。金髪の白い肌のアズールとエルフの妖精、黒髪で褐色の肌のアスマールとジンの妖精がそれぞれダンスのカップルになると、ジェナヌとシャムスサバ姫はこの二組のカップルの予定調和的な成り行きにコメントする。

Jénane : La solution devient évidente.

La Princesse Chamsous-Sabah : On dirait que c'est fait exprès.

(訳)

ジェナヌ：結末はわかっているようなものですね。

シャムスサバ姫：わざわざお膳立てされているみたい。

しかし、二組のカップルはしっくりこないようで、女性は二人とも、もう一方の男性に惹かれると告げる。パートナー交代後、黒髪と金髪が組み合わさったカップルは二組ともダンスのパートナーから、本物のカップルになってしまう。ジェナヌとクラブーはこう評価する。

Jénane : C'est encore mieux comme ça.

Crapoux : Oui, c'est la solution d'avenir⁽¹³⁾.

(訳)

ジェナヌ：こっちの方がもっといいわ。

クラブー：そう、これこそ未来の解決策。

自分にはないものを相手に見だし、そこに魅力を感じるという結末はカップルの話にとどまらない。

この婚活が予定調和的でないのは、「肌の色」が混じるからでもある。実際、肌の色を問題にしないという態度は映画の各所に見られる。冒険に出立するアズールとアスマールに託したハトが、血の痕跡をつけてジェナヌの元に戻ってきたとき、女中が「C'est Azur ou Asmar ?」「アズールでしょうか、それともアスマール？」と聞くと、ジェナヌは「Leur sang a la même couleur !」「二人とも同じ血の色をしているのだよ⁽¹⁴⁾！」と答える。物語を通してジェナヌは、外見の違いによって区別することに警鐘を鳴らしていた。「純潔」や「血統」という神話はこのようにして乗り越えられる。la solution d'avenir「未来の解決策」が、二組のカップルから生まれるであろう「混血」の子どもであることは自明であり、二つの国、二つの言語、二つの文化を体現する多文化の象徴なのである。「混じり合うこと」は「統合」を理想とし、未来志向のフランスのアレゴリーともいえるのではないだろうか。

『アズールとアスマール』は、「所有」から「共有」への物語でもある。乳兄弟はそれぞれ母親が自分のものだ譲らず、喧嘩をしていた。海に向こうで再会し、ジンの妖精の宮殿にたどり着いたときにはお互いがお互いの幸せを願い、ジェナヌを「notre mère」「ぼくたちの母さん」と呼ぶ。ジェナヌは甲乙つけがたい二人の息子の行動で「départager」（「どちらかに決める」ことは）できないと訴える。息子たちは母親を共有し、母親は息子たちを等しく愛する。この点からもこの映画は「ぼく」の所有物から「私たち」の共有物に至る道のりをたどる物語といえよう。

4. 教材としての『アズールとアスマール』

本作のアラビア語の台詞に字幕や吹き替えがついてないことはすでに述べた。それについてオスロ監督はこう述べる。「フランスで上映すると、大人のほうがアラビア語を訳さなかったことに対して不満を言う人たちがいる。逆に子どもは全くそういう不満はなく、楽しんでます。いつもそうなんですけど、子どものほうが理解があって、現実の世界で字幕が出てこないというのを理解しています⁽¹⁵⁾。」

出版社 Nathan からは、映画のコントをまとめた本が出版されており、カット割りと台詞がすべて読める。アラビア語の部分には仏語訳がついており、映画では訳されていなかった台詞の翻訳を読むことができる。さらに年齢別に映画の背景となった文化、歴史の説明をする本も出版されている⁽¹⁶⁾。また、ゲームも販売されており、映画の物語の冒険が「スーパーマリオブラザーズ」さながらに、子どもたちを夢中にさせている。

ということは、本作は子ども向けの作品なのだろうか。それに対してオスロ監督は首を振る⁽¹⁷⁾。子どもを子ども扱いして、これくらいはわかるだろうと加減された作品は面白くないのだ。ゆえに、芸術と歴史の宝庫である本作品を深く理解することで、痛快で面白

いだけの冒険譚が、世界への誘いとなり、未知の世界が奥行きをもって子ども達の前に立ち現れる。フランスの学校では、生きた素材を教材として積極的に取り入れる傾向がある。子供たちを取り巻く社会と教育をつなげ、歴史から学び、問いかける力を養い、ひいては批判精神を身に着けさせるためである。

フランスのCNC（国立映画センター）には、「学校と映画⁽¹⁸⁾」という教育プログラムがある。フランスでは、映画は消費される「商品」ではなく、保護すべき「芸術」とみなされ、「第七芸術」と呼ばれている。「学校と映画」は公立幼稚園年長から小学校低学年までの生徒をこの第七芸術に親しませるためのプログラムである。学校が映画館と連携を取り、教育の中に映画を組み込んで、総合的に学習させる。教育現場では、実際の授業のカリキュラムに映画を組み込み、教材が作成されている。登場人物や風景の「塗り絵」といった遊戯的なものから、言葉の使い方、動詞の活用などの「学習」もある。美術、国語、社会の教材としても活用することができる。教員のために「教授用資料」が準備され、教える側の工夫で魅力的な授業になる。

『アズールとアスマール』の教授用資料には、フランス共和国の「博愛」や「平等」といった価値を盛り込んでいる。映画に関連する国を調べてさせたり、映画の場面に現れる事物、人物、色、配置を、モデルになったであろう絵画や建築の画像と比べて細部を理解するといった美術史の学習も可能になっている。（図版参照）

5. 大人たちの無理解と偏見

2011年に「学校と映画」のプログラムをめぐる出来事があった。フランスのガール県の小学校一、二年生のクラスで、「学校と映画」の一環として『アズールとアスマール』を取り上げたときのことである。映画の中の挿入歌である子守歌を学校のお祭りでお披露目するために、教師はクラスでフランス語とアラビア語の歌の練習をさせていた¹⁹。そのときに生徒の親から、自分たちの子供がアラビア語で歌わせられたと抗議する文書が他の生徒の親たちに配られたのである。「子供がアラビア語の歌を歌うことに、何人かの親が驚いている」との内容だった。

皮肉なことに、相手を知り、異なる言語を用いる他者との共存を説いた作品であったのに、親たちはその作品を知ろうともせずに、「アラビア語」というだけで拒否反応を引き起こしたのだった。学校側は「学校は公立で、政教分離している（publique et laïque）」と教師を擁護する声明を出すほどであった。この問題は教育相にも報告され、同様にフランス共和国の公立学校のルールを再確認している。オスロ監督は、問題の文書を配布した親たちを『アズールとアスマール』無料上映会に招待し、寛容の精神を描くこの作品を

知ってもらうことに努めていた。不寛容に対抗する武器は寛容しかないことを、オスロ監督自身、行為で示したのだった。フランスでは「アラビア語」というだけで過剰反応することはめずらしくない。アラビア語が移民の言葉で、これを教えると子どもがイスラム化するという図式は、他の場面でも見られる⁽²⁰⁾。

6. 移民の子どもたちに見てもらいたい作品

この映画が封切られる前の2005年フランス各地で郊外に住む移民の若者が暴動を起こした。それに対して大統領就任前に内相であったニコラ・サルコジは移民に対して強硬姿勢を取ることになる。(10月、ニコラ・サルコジはパリ市内などで暴動が発生した際、参加者に対して「人間のくず」と発言したことも問題視された。) モンフェルメイユでの若者たちを取り巻く社会を描いた『レ・ミゼラブル』でも、警察官による移民の子どもたちの扱いが衝撃的だった。移民をどう位置づけるのかが、フランス社会の大きな関心事である。

映画では、一般に見られる人々の反応をも描いている。映画の前半の舞台フランスでは、アズールの父親はジェナヌに人種差別的暴言を吐き、アズールの世話をする必要がなくなったジェナヌをその日のうちに追いだす。マグレブの国では、青い目に対して迷信を信じ、偏見にとらわれているアラブ人たちがいる。クラブーは長年マグレブで生活しているのにそこに美しさや良さを見ようとはせず、「フランスにはあるものが、ここにはない」と不満ばかり漏らしている。アスマールもまた、幼い頃には自分の住んでいるフランスは自分の国とは見なしていなかったし、マグレブの国に移り住み、アズールと再会してからは、自分と母親を追放したフランス人を恨みつづけている。フランス人をひとくくりにし、アズールを無視しつづけるのである。

オスロ監督自身、幼年期をギニアで過ごし、異文化を体験している。インタビューの中で、この映画を特にフランスのアラブ系移民の子供たちに見てもらいたいと述べている。一番伝えたいメッセージは、「ジェナヌの言葉に即していえば『きみたちは二つの国、二つの言葉、二つの宗教を知っている。つまりそれらについて他人よりも二倍知っているということなんだよ』ということ⁽²¹⁾」だと言う。つまり、この映画をアラビア語の字幕なしに見られるのはアラブ系フランス人であり、モノリンガルのフランス人たちがわからないことも、アラブ系フランス人にはわかるというわけである。

オスロ監督は映画を通じて、移民たちに自分たちが手にしているチャンスに気づいてもらい、破壊活動ではなく、時間をかけて相手を理解すること、対話を通して知識を得ることのメリットを伝えようとしているのではないか。ひいてはフランスを超えて、世界で同じ問題を抱える地域でも多様な出自の人間が文化を豊かにすることを暗示しているだろう。

7. 結びに代えて

世界が西洋中心の考え方に傾き、イスラムには分が悪い状況の中、この映画は大切なことを思いださせてくれる。それは映画の随所で描かれるイスラム文化の豊かさ、寛容の精神である。イスラムの統治にある国で、『コーラン』でいう「啓典の民」キリスト教徒やユダヤ教徒には人頭税の支払いと引き換えに信仰の自由が認められていた。映画では賢者やドアが学問を修めた者として重用されていた。王宮では最新の科学を象徴する実験器具が所狭しと置かれていた。街の夜景ではモスク、教会、シナゴークが共存し、学問所、病院、旅人をもてなす旅籠^{はたご}も見られた（図版2参照）。中世では宗教が人々の生活を支配していたが、異端審問や異教徒迫害が行われた中世ヨーロッパのキリスト教国との比較において、8世紀から11世紀までのイスラム世界は寛容といえよう。さらに西洋がイスラムの恩恵を受けていることも忘れがちである。西洋ではイスラムとの交流によってもたらされた12世紀ルネサンスと呼ばれる変革があった。さらにそれなしには14世紀のイタリアからヨーロッパに伝わるルネサンスは生まれなかったといわれる。イスラム圏の存在があって古代ギリシアの諸学問の系譜が受け継がれ、アラビア語からの翻訳を通して、西洋に伝えられた歴史を、今一度思い起こす必要があるのではないだろうか。

高畑監督は『アズールとアスマール』を「役に立つ」と評した。日本語版のDVDには日本語吹替版、字幕版に加えて、アラビア語のみ字幕が付いているバージョンも収録されている。つまりこの映画を3通りに楽しむことができる。映画の一部が理解できないもかしきから、世界の理解は言語を通じておこなっていることを、あらためて認識させてくれる。娯楽映画の取っつきやすさをそなえつつ、深い異文化体験をさせてくれる貴重な映画である。

注

- (1) *Azur et Asmar* https://www.michelocelot.fr/attachments/DP_AA.pdf p. 10. (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (2) 『『アズールとアスマール』高畑監督の解説』 <https://www.ghibli-museum.jp/azur/critique/> (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (3) 『『アズールとアスマール』イントロダクション』 <https://www.ghibli-museum.jp/azur/introduction/> (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (4) *Les 2000 vues de Azur et Asmar*, Michel Ocelot, Nathan, 2007, p. 20.
- (5) *Azur et Asmar* https://www.michelocelot.fr/attachments/DP_AA.pdf (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (6) *Les 2000 vues de Azur & Asmar*, Michel Ocelot, Nathan, 2007, pp. 25-26.
- (7) 内藤正典氏によると、映画のアラビア語は話し言葉ではなく、かなり正確な古典アラビア語（フスバ）で、美しい正則アラビア語である。「特集 アズールとアスマール 異文化との

- 共生の鏡——アズールとアスマールが得たもの」, 『熱風：スタジオジブリの好奇心』2007年7月号, スタジオジブリ, p. 11.
- (8) « Traduction française des phrases en arabe classique », *Les 2000 vues de Azur & Asmar*, Michel Ocelot, Nathan, 2007, pp. 202.
- (9) 「特集 アズールとアスマール 上機嫌な映画 ミッシェル・オスロ監督×高畑勲監督」, 『熱風：スタジオジブリの好奇心』2007年7月号, スタジオジブリ, p. 38.
- (10) 「特集 アズールとアスマール 上機嫌な映画 ミッシェル・オスロ監督×高畑勲監督」, 『熱風：スタジオジブリの好奇心』2007年7月号, スタジオジブリ, p. 38.
- (11) *Princes et Princesses*, 『プリンス & プリンセス』(DVD)
- (12) 2020年7月にトルコはアヤ・ソフィア(ハギア・ソフィア)が博物館であることを無効とし、イスラムのモスクと位置づけた。
- (13) *Les 2000 vues de Azur et Asmar*, Michel Ocelot, Nathan, 2007, pp. 209, 215.
- (14) *Ibid.*, p. 155.
- (15) 「特集 アズールとアスマール 上機嫌な映画 ミッシェル・オスロ監督×高畑勲監督」, 『熱風：スタジオジブリの好奇心』2007年7月号, スタジオジブリ, p. 38.
- (16) Michel Ocelot, *Les 2000 vues de Azur & Asmar*; [illustrations d'après son film *Azur et Asmar*], 2007; Michel Ocelot, *Azur & Asmar*, Nathan, 2009; Michel Ocelot; texte de Sandrine Mirza, *Au temps d'Azur & Asmar*, Nathan, 2006.
- (17) « Pourquoi ce film ? Interview de Michel Ocelot » http://web.ac-reims.fr/dsden52/ercom/documents/education_artistique/ecole_et_cinema/2018_2019/180313_azur_&_asmar/dossier_pedagogique_azur_&_asmar.pdf (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (18) CNC, « Ecole et cinéma », <https://www.cnc.fr/cinema/education-a-l-image/ecole-et-cinema> (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (19) « SALAAM – Une professeure mise en cause pour avoir enseigné une berceuse en arabe » article publié le 16 février 2011, *Le Monde*, https://www.lemonde.fr/big-browser/article/2011/02/16/salaam-une-professeure-mise-en-cause-pour-avoir-enseigne-une-berceuse-en-arabe_5988860_4832693.html; « Azur et Asmar : la berceuse qui réveille les chauvins » article daté du mardi 22 février 2011, *L'Humanité* <https://www.humanite.fr/azur-et-asmar-la-berceuse-qui-reveille-les-chauvins> (最終閲覧日 2021年1月5日)
- (20) 例として、ベルギーのジャン＝リュック & リュック・ダルデンス監督の映画『その手に触れるまで』*Le Jeune Ahmed* (2019) にも学校の保護者会で、アラビア語の課外活動について意見を交わす場面がある。
- (21) « Entretien avec Michel Ocelot », in *JDI, Journal des instituteurs et des professeurs des écoles*, No. 1601, octobre 2006, pp. 2-3.

付録1 『アズールとアスマール』関連資料リスト(フランス語サイト) 2020年1月5日現在.

1. Site Michel Ocelot
<https://www.michelocelot.fr/azur-asmar>
 à télécharger le document au format PDF : https://www.michelocelot.fr/attachments/DP_AA.pdf
2. « Azur & Asmar Dossier pédagogique » - rectorat de l'académie (Reims)
http://web.ac-reims.fr/dsden52/ercom/documents/education_artistique/ecole_et_cinema/

- 2018_2019/180313_azur_&_asmar/dossier_pedagogique_azur_&_asmar.pdf
3. Fiche pédagogique «Azur et Asmar»
https://www.reseau-canope.fr/atelier-val-d-oise/cinema/IMG/pdf/Fiche-pedagogique_Azur_et_Asmar-ac_Clermont-Ferrand.pdf
 4. « Dossier pédagogique : Démarche générale autour du film »
http://www2.ac-lyon.fr/enseigne/arts-culture/IMG/pdf/dossier_pedagogique_AZUR_ET_ASMAR.pdf
 5. « Azur et Asmar : Références autour du film - liens possibles avec l'Histoire des Arts »
http://ww2.ac-poitiers.fr/dsden16-pedagogie/sites/dsden16-pedagogie/IMG/pdf/hda_references_azur_asmar.pdf
 6. dossier pédagogique, institutfrancais.de.
<http://www.cineligue31.com/images/stories/dossiers-pedagogiques/DP-Azur-et-Asmar-2.pdf>
 7. « Autour de “Azur et Asmar” » (publié le 29/09/2015 - mis à jour le 09/04/2020)
<http://ww2.ac-poitiers.fr/dsden16-pedagogie/spip.php?article1214>
 8. Site Patrick Straub
http://patrick.straub.free.fr/pdf/azur_HA_.pdf
 9. Azur et Asmar
https://www.reseau-canope.fr/notice/azur-et-asmar_9188.html
 10. Azur et Asmar. Dossier pédagogique « Aux films, citoyens ! »
<https://cdn.reseau-canope.fr/archivage/valid/N-9188-13824.pdf>
 11. Azur et Asmar. Dossier pédagogique
https://www.ac-orleans-tours.fr/fileadmin/user_upload/ia28/doc_peda/Arts_et_Culture/cinema/2013-2014/Azur-et-Asmar.pdf
 12. Dossier de presse
<https://medias.unifrance.org/medias/74/119/30538/presse/azur-et-asmar-dossier-de-presse-francais.pdf>
 13. « Ecole et cinéma, 2015/2016, 1^{er} trimestre, Cycles 2 et 3 Document »
http://web64.ac-bordeaux.fr/fileadmin/fichiers/circos/biarritz/JPMERCE/ecole-et-cinema/azur_et_asmar_dossier_peda.pdf
 14. Azur et Asmar. Dossier pédagogique
<https://www.atmospheres53.org/film/azur-et-asmar/>
à télécharger le document au format PDF :
<https://www.atmospheres53.org/wp-content/uploads/2019/05/Azur-et-Asmar.pdf>
 15. Azur-et-Asmar, pistes-de-travail
<http://www.transmettrelecinema.com/film/azur-et-asmar/#pistes-de-travail>
 16. « Ecole et cinema, Dossier pédagogique »
http://www.cndp.fr/crdp-besancon/fileadmin/CD25/Fichiers_cd25/Ecole_et_cinema/Dossier_pedagogique.pdf
 17. « Ecole et cinema, Ressources pédagogiques »
https://applications.ac-montpellier.fr/apps/dsden30/ia30/dossiers/arts/ecolecine/index.php?module=pedagogie&rubrique=afficher_pedagogie&vue=consulter_ressources&idcat=101&categorie=Azur+et+Asmar&gauche=137&droite=138

18. document_pedagogique

https://www.canope92.fr/ecoleetcinema/Azur_et_Asmar_document_pedagogique.pdf

付録 2 映画の場面とそのモデルの図版



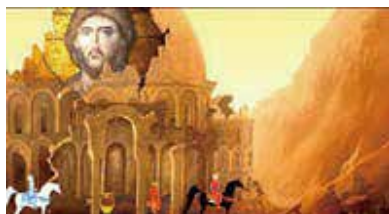
図版 1

- (左) 映画の場面。アズールが迎え入れられるジェナヌの屋敷。
 (右) グラナダのアルハンブラ宮殿、獅子の中庭。



図版 2

- (左) 映画の場面。街の夜景。シャムスサバ姫がアズールに街を紹介する。「そびえる宮殿、モスク、教会、シナゴグ、本の市場の中央にある学問所（マドラサ）、金銀細工商市場、香辛料市場、鍛冶屋市場、染物市場、病人を治療する病院（マリスタン）、旅人をもてなす旅籠（フォンドウーク）」が一望できる。モスク、教会、シナゴグが共存する。
 (右) 《アラブの街》、カンディンスキー画、1905 年、パリ、現代美術館蔵。



図版 3

- (左) 映画の場面。ビザンティン様式寺院の遺跡。
 (右) キリストのモザイク。アヤソフィア（ハギア・ソフィア）。



図版 4

- (左) 映画の場面。アスマールが悪徳商人の一味に襲われる場面。古代ローマの遺跡の前。
 (右) カルタゴの遺跡。現在のチュニジア、カルタゴの戦役が終結するのは紀元前 146 年。カルタゴの敗北で、ローマ帝国の領土は北アフリカまで広範囲に及ぶ。



図版 5

- (左上) 映画の場面。シャムスサバ姫の宮殿内部。
 (右上) コルドバの聖マリア大聖堂メスキータ（大モスク）内部の円柱の森。建物にはイスラム寺院とキリスト教の教会が同居する。
 (左下) 映画の場面。宮殿。
 (右下) 映画の場面。宮殿内天文台の場面。シャムスサバ姫とアズール。



図版 6

- (左) 映画の場面. 金髪のエルフの妖精と黒髪のアスマールがダンスを踊る .
 (右) 映画の場面. 出自, 属性, 民族, 世代が違う 8 人の輪. オスロ監督曰く, ジンの妖精の宮殿内部はイスタンブールのアヤ・ソフィア (ハギア・ソフィア) を模している .



図版 7

- (左) 映画の場面. アズールの父.
 (右) 《ブルゴーニュ公 (善良王フィリップ III 世) の肖像》、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン画、1445 年頃、フランス、ディジョン美術館蔵.



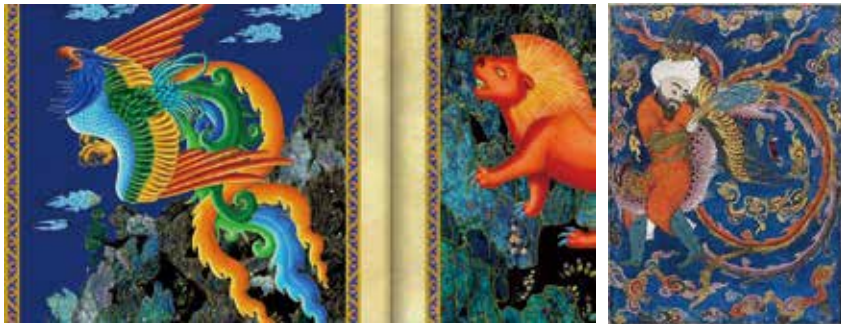
図版 8

- (左) 映画の場面. 悪徳商人の一味がアズールとアスマールを追う.
 (右) フランス、バイユーのタペストリー、11 世紀.



図版 9

- (左) 映画の場面。ジェナヌの屋敷で音楽を演奏する音楽家たち。
 (右) 「コンスタンチノーブル宮殿と街の服装」より音楽家たち。1720 年。



図版 10

- (左) 映画の場面。賢者ヤドアの蔵書。ジンの妖精救助の冒険を語る。
 (右) 「シームルグによって昇天するヒポクラテス」シームルグはペルシア神話に登場する神秘の鳥。
 イスタンブール、トプカプ宮殿博物館附属図書館蔵、作者不詳、1703 年。



図版 11

- (左) 映画の場面。深紅のライオンと「野獣語」を話すアズール
 (中央) 映画の場面。深紅のライオンがアズールを洞窟の入り口まで連れていく場面で、途中の道にも岩がそびえて立っている。
 (右) フランスの先住民のメンヒル。紀元前 3300 年前、フランス、カルナック。



図版 12

(左) 映画の場面. 怪我したアスマールを背負うアズール.

(中央) 映画の場面. 深紅のライオンの通り道.

(右) お守り、チュニジア、紀元前 4 世紀.